

Rhyming Slang とワードペア

青 木 繁 博

Rhyming Slang and Word Pairs

Shigehiro Aoki

0. はじめに

筆者はこれまでワードペアと呼ばれる言語現象（[A and B] の型を持つ英語並列表現）を研究してきたが、その用例を集める中で、かなりまとまった数の例が rhyming slang（以下RS）という口語表現の一種であると説明されていることに気付いた。しかしながら、先行研究においてはRSとワードペアとを直接結び付けて論じるものはほとんど見られなかった。後述するようにRSはいくつかの特定の状況でのみ用いられるとされているが、それに対してワードペアは英語の歴史を通じて、RSよりもはるかに広い場面で用いられていると考えられる。より「汎用的な」ワードペアに見られる諸特徴は、限られた状況におけるRSの中では異なった傾向を示すこともあるのではないか。本論文は、RSとワードペアの接点を中心的に考察し、特に、これまでに行われてきたワードペア研究でわかったこと（モデルや考え方など）と、RS全般やそこに含まれる「RS形式のワードペア」の実際の用例とを照らし合わせることによって、今までになかった観点からRSの理解が進むことを目指すものである。

1. rhyming slangとは

1.1. 専門の辞書等におけるrhyming slang

RSまたはそれを含む表現（スラング全般など）を取り上げた辞書には古典的なものもいくつかあるようだが、現代においてはFranklyn (*A Dictionary of Rhyming Slang*) やAyto (*The Oxford Dictionary of Rhyming Slang*) などが代表的なものとして挙げられるだろう。前者はアルファベット順に、後者はテーマごとに、多くのRSの用例が採録されている。またRSを扱った最近の書籍としてはSmith (*Cockney Rhyming Slang: The Language of London*) が挙げられるが、そこではRSの形成について、以下の例を用いて比較的シンプルに説明されている。

stairs (subject word) → *apples and pears* (rhyming phrase) → *apples* (how the phrase is commonly rendered) (p.10)

当該ページ前後のSmithの説明を要約すると、表したいものと韻を踏む、たいていは2語以上のフレーズを作り、韻を踏んでいる部分を取り除く、といったところだろうか。一言で言えば、このプロセスを通じて作られる、ある種の「隠語」がRSである。もちろんSmithも例外的な形成の仕方が存在する点には配慮しているが、上記がRSの「プロトタイプ」であると捉えることができるだろう。

なおRSは口語表現ゆえか、現代においてはオンライン上の辞書も見られるなど、ネット時代にも生き延びているようである。出版された書籍の中にも、RSが何を表すかをクイズにしていたり、あえてRSを多用して書いたであろう『聖書』など、オーソドックスな使用例とは言えないかもしれないが、それはそれとして当該の表現が今も幅広く活用されている様子が窺われる。

1.2. 英語学の用語辞典等におけるrhyming slang

『英語学要語辞典』にはRSそのものの見出しはないが、“Cockney (dialect)”の項において「語彙のレベルでは押韻スラング (rhyming slang) が特徴である」との説明がなされている (p.103)。また『現代英語情報辞典』も同様に“cockney; Cockney”の項でRSの説明が見られ (p.264)、コックニー (ロンドン方言) との関連が指摘されている。

『新英語学辞典』では“slang”の項の中に「押韻俗語 (rhyming slang)」の説明が見られる (pp.1122-23)。そこではいくつかの例示とともに、押韻俗語の起源自体は不明であることや、ロンドンの地名が使われるものが多くその点はコックニー起源を裏付けていること、しかし第二次世界大戦後はコックニーに限らずより一般化したことなどが説明されている。もちろんコックニーの特徴としてはRS以外にも発音などいくつかの点が指摘されるものであり、その点は前述の『英語学要語辞典』でも示されている。しかしRSそのものがコックニーにおける大きなポイントの1つであることには間違いなく、現に前述のSmithはコックニーの諸特徴の中でも特にRSに焦点を当てていた。

なお上掲のほとんどの先行研究ではそうではないのだが、一般的には、「rhyming slang イコール 特定の時代におけるロンドン方言」とする、やや誤った説明なども見られない訳ではない。それはすなわち当該の表現はイギリス英語に「特有」のものとする見立てである。この点が必ずしも正しくないということは以下の論考でも明らかになると共に、前述のAytoにおいては、RSは決して均一なものではなく、具体的には以下の3つの区分が見られると指摘されている（以下はIntroduction, ix-xiの内容を再構成したもの）。

- 1) 「古典的な」(“博物館もの”)のRS。その多くは19世紀に遡る。
- 2) 1に倣って、1の影響を受けて作られたRS。概ね20世紀前半。
- 3) 現代において作られたRS。20世紀後半、概ね1980年代以降。

さらに1についてはほぼイギリス英語の話者に限られるといった説明もされているが(同上)、その後はイギリス英語に限らず使用されていく点も示唆されており、同様のことは前述の『新英語学辞典』にも指摘されているほか、以降に展開される本論文の調査でも示されるものと思われる。

2. ワードペアとrhyming slang

2.1. ワードペアとは

ワードペアとは [A and B] をプロトタイプとし、その周辺にゆるやかに集まる集合体である、とするのが筆者の現行の定義である（青木 2016a）。これは、必ずしも接続詞はandに限られないが、andがもっとも多い点を示すことができると考えられる。それ以外の先行研究においては、等位接続詞でもって結び付けられたもの、などと定義付けされることも多い。

このような形態のワードペアが何を表すかについては、古英語から現代英語まで、また異なるレベルの文体やさまざまな状況・文脈において、多くの意味・機能・役割を果たすものという研究が進められてきた。法律用語（Gustafsson 1984）、議論・対話の文への文体面での寄与（Kikuchi）、外国語の翻訳・訳読の場面で（渡辺）、チョーサー作品などの高尚な文体（谷 2003, 2008; Leisi）、スピーチの効果を高めるため（青木 2013）など。また古英語から中英語にかけての作品全般（Koskenniemi）、中英語のキリスト教文学全般（Katami, Wilson）、広く現代英語における用例（Gustafsson 1975, 須部）、さらには語順や頻度などの面に着目した研究も進められている（Malkiel, Cooper and Ross, Mollin）。ワードペアの用法で「特徴的」なのは慣用句・定型表現であるが、ワードペア全体は必ずしも慣用的・定型的ではない。歴史的に見れば明らかなのだが、例えば現代英語では慣用的とみなされる特定のペア表現も、ある時点で「生み出された」ものであり、当該の表現が有用であるがゆえにその後も「残っている」というのが実情に近いのではないだろうか。そして、今も常に新しい表現（新奇な表現）が生み出され続けていることから、個々のペアは盛衰を繰り返しながらも、ワードペアという表現技法そのものは「生きている」（生産性を保っている）と考えられる。

2.2. ワードペアとrhyming slangの接点とは

ワードペアが広い文脈で用いられているということは既に述べたが、その使用文脈の1つが、本論文で扱うところのRSであると考えられる。

上掲の複数のRSの辞書などにはandが用いられた表現（ここで言うところの「ワードペア」）も多く採録されている。Ayto (Introduction, xv) のようにRSにはandを含む表現が多い（あるいは鍵となる）といった言及がされている場合もあるが、反面、RSとワードペアとを結び付けて「論じる」研究はほとんどなかったとは言えないだろうか。「RSにはなぜandの表現が多いのか」については根源的な問いであり、本論文でも答えは出ないかもしれない。しかしこれまではそういった疑問が提示されること自体がほとんどなく、そもそも「RSにはandの表現が本当に多いのか」という点についても、数字などを用いて実証的に測る研究などを、少なくとも筆者は見つけることができなかった。RSの用例を紹介したものの多くは「収集」に重点を置いていると考えられ、一つ一つはたいへんな労作・有益な資料ではあるが、研究という面に関してはまだ十分に進められていない部分も残されていると考えられる。

概してワードペアの方がRSよりも広い範囲で、また近・現代だけでなく古英語以来の歴史を持って用いられている。このことは用例数で上回ることを指すのではなく、さまざまな文脈において、高尚な文体から平俗的なものまで、広く用いられていることを示す点は既に述べた。このような古英語以来の「表現としてのワードペア」に関しては、関連する先行研究はより多く、そこでの研究はより進んでいると言えるのではないか。本論文で主として扱う用例が「Rhyming Slangの一種としてのワードペア」か、「ワードペアの一種としてのRhyming Slang」か、などについては意見が分かれるところかもしれないが、両者は接点を有している以上、ワードペア研究を通じてこれまでに得られた研究成果、モデル

や研究手法などが、RSの考察においてもある程度あてはまるのではないかと考えられる。あるいは少なくとも、どの程度あてはまるかを実際に検証していく価値はあると考えられる。これらを通じて今までになかった視点からRSを捉えることもできるのではないだろうか。

2.3. 本論文における研究課題

前の2節などを踏まえて、本論文における研究課題は以下のようになる。

RQ1 Rhyming Slangは、先行研究の一部や一般に考えられているような年代および地域分布か。

また、もしそうでないとなれば具体的にどのように分布しているのか。

RQ2 Rhyming Slangにはどの程度の割合でワードペアが含まれるのか。またその割合はどの時代でも同じなのか、それとも何らかの偏りが見られるのか。

RQ3 ワードペアに見られる傾向や特徴などが、Rhyming Slangでも同じように見られるのか。あるいは両者は異なるもので、「Rhyming Slangならではの」または「ワードペアならではの」面が示されるのか。

3. 本論文における調査対象・手法等

これまでに述べた観点から、本論文ではRSとワードペアの接点を中心的に考察する研究を進めるが、具体的には以下の調査を行う。

- ・ 本論文ではOED Onlineの見出しや小見出しにおいてRSとして提示されている語句、または直接はそう提示されていないが「rhyming slangにあたる」といった言及が見られる語句を抽出する。それらについて、年代や地域性など複数の点を調査する。
- ・ 抽出したRSの中には、接続詞andでもって結び付けられた2語「ワードペア」が見られることになるが、これを「ワードペア形式のRS」と呼ぶことにする。それらのワードペア形式のRSが、上述の年代や地域性などの点において、RS全般と同様の傾向を持つかを検証する。
- ・ 用例の抽出はOED Online標準の検索機能（全文検索）を基本とするが、それだけでは検索結果が正しいと言えない面がある。全文検索を用いた場合RSや関連表現はほぼ当たっていると考えられるが、反面それとは関係のないものが結果に含まれることになる（いわゆるfalse positiveが出る）。また各項目中に採録されている例文については、1つの項目の中にRSのみが提示されている場合と、RS以外の例文も混在している場合とがあり、例えば初出年などが検索結果で単純に示されたものとは異なっていることがある。これらの問題点は現時点では機械的に処理することができないため、検索結果はすべて直接目視して、適切な例が抽出できているか、データは適切かなどをチェックした。
- ・ OED Onlineでは同一の表現が複数のエントリーに見出されたり、逆に異なる意味の表現や異形態が1つのエントリーにまとめられているケースもある。本論文はOED Onlineでの分類に基本的には従いつつも、明らかなものについてはまとめるなどして、集計やリストを作成する際には適宜調整を行っている。
- ・ 以降に用例を引用する際に、異綴りやヴァリエーションが見られるものについては、代表的なもののみを紹介している場合がある。また作表の都合等により、OED Onlineにあるイタリックやボールドなどの書体情報を省略している場合がある。

- ・以下に示す調査結果は概ね2016年12月27日から2017年2月17日までにアクセスして得たデータに基づくが、OED Onlineは随時アップデートが実施されているため、アクセスする時期によっては結果が異なる可能性がある。

どの資料から用例を取るかに関しては、もちろん用例の数自体は前述のRS専門の辞書類の方がはるかに多く、そのいずれかを調査対象とするといったアプローチも考えられただろう。確かにその方が多くの表現を扱うことができるであろうが、反面OED Onlineには各表現の「初出の年」が示されており、上に挙げた本論文での研究課題、特にRQ1の一部である「RSの年代」を調査する際には有益である。さらにはOED Onlineには語句そのものに加えて例文が随時引用されていることも本論文には役立つものと想定される。以上の観点から本論文では調査対象を上述のように設定した¹。

4. 調査結果および考察

前述の余分なものや紛らわしいものを除き、OED OnlineにおけるRSは全部で153例であった。それらはすべて本論文の末尾の【資料】にまとめている。

RSの形成については、第1章で述べたように、主として後半部の韻を踏む部分が欠落することが多いとされている。筆者が確認した限りでは、全153例中76例に何らかの形での短縮形が見られた。約半数であり、短縮はやはりRSの典型的な形成の仕方であると言えるだろう。中には以下のように「二重三重」の変遷を辿ったとされる twopenny 'head' のような例もあった。この場合、head が loaf of bread を経て twopenny に至る間に2度の短縮が観察されるとのことである。

twopenny, *adj.* and *n.*, s.v., B. n. 4. より用例を引用：

1931 'G. Orwell' *Hop-picking* in *Coll. Ess.* (1968) I. 71 The hop-pickers..also used the abbreviated rhyming slang, e.g. 'Use your twopenny' for 'Use your head' . This is arrived at like this: head, loaf of bread, loaf, twopenny loaf, twopenny. (下線は筆者)

4. 1. rhyming slangおよびワードペア形式のrhyming slangの年代分布

確認された153例について、初出の年をおおよそ世紀ごとに分類すると以下ようになる。なお19世紀の46例はいずれも1845年以降が初出の年であった。

18世紀以前：3例

19世紀：46例

20世紀：104例 うち、

20世紀前半（1945年まで）：82例

20世紀後半（1950年以降）：22例

19世紀と20世紀（特に前半）の初出が多いことは、前述したAytoの言う3つの区分のうち第1と第

¹ 以下に扱う用例の一部には差別用語など不適切な表現が含まれる場合があるが、本論文は英語の口語表現を研究するものであるため、その点についてはご理解を頂きたい。

2のものに相当すると考えられる。第3の区分、すなわち最近の用例があまり見られない点については、新しい用例であるからこそ、OED Onlineに採録されることが単に「間に合っていない」だけかもしれないという面は否定できない。あるいはひょっとすると、20世紀終盤から現在まで、“Britney Spears”や“Quentin Tarantino”など（これらはOED Onlineにはないが前掲のRSの辞書類には見られる最近の例）、ぱっと目を引くような例は作られたものの、RSそのものが生産される数としては少なくなっているという可能性もあるかもしれない。

最後出の年については、それが本当に最後の年で以降は用いられていないのか、それとも使用は続いているが辞書に載っていないに過ぎないのかは、大変難しい問題であろう。したがって参考程度だが、それぞれのRSがいつの年まで見られるかについても調べたところ、最後出の年として「21世紀以降（2001年以降）」の例が示されていることを確認できたものは31例あった。前述の初出の年ごとの分類にあてはめて、各年代のRSの例が21世紀にも見られる割合を示せば以下ようになる。これらの割合で、RSが「残っている」と言い換えることもできるかもしれない。

18世紀以前：3例中0例（0%）
 19世紀：46例中5例（約11%）
 20世紀前半：82例中19例（約23%）
 20世紀後半：22例中7例（約32%）

これを見ると、数そのものとしては、19世紀に作られたRSはほとんど失われており、前述のAytoが言うように“博物館もの”になっている可能性もあるが、反面、減り方としては「漸減」であり、10%台、20%台、30%台と、現代に近づくにつれて自然と減っているようにも捉えられ、決して特定の時代のRSだけが極端な勢いで死語・古語になっていくといった印象ではない。

次にワードペア形式のRSについてだが、OED OnlineにおけるRS全153例中、ワードペア形式のRSは34例（約22%）であった²。

なおRS全般において使用される接続表現としては、and以外では“of”や“’s”（所有格である場合と、isまたはhasの縮約形である場合とがある）も多いが、今回の用例の中では数はそれぞれ9例にとどまっている。RSで語句が繋がれるとき、接続詞や前置詞なしで直接語句が結ばれるものを除けば、「繋ぎの言葉」としてはandが最も多く使われていることがわかった。

ワードペア形式のRSがどのような年代分布を示しているかは以下ようになる。これを見ると、18世紀以前を除けばほぼ均等で、年代の偏りなく、どの時代においてもある程度の割合でワードペア形式が用いられていることがわかる。

18世紀以前：3例中0例（0%）
 19世紀：46例中10例（約22%）
 20世紀前半：82例中20例（約24%）
 20世紀後半：22例中4例（約18%）

² なおOED Onlineにおけるワードペア全体の数は（数え方にもよるが）約2,000あると見られる。

4. 2. rhyming slangと地域性

OED OnlineにおけるRS全153例中、59例において *Brit.*, *Austral.*, *N.Z.*, *U.S.*, *Sc.*, *S. Afr.* といった地域を示すラベル付けが見られた。逆に、OED Onlineでは「無印」のものはイギリス英語あるいはグローバルな英語であると想定されるのだが、この辺りは明確なところはわからないと言わざるを得ない。

以下が明示されている地域の内訳であるが、1つの表現に複数のラベルが付いている場合もあるため合計は59を超えることになっている。また、OED Onlineの地域の説明は、例えば単に「*Austral.*」と明言されているものから、「主に*Austral.*」など、ニュアンスに幅がある。ここではその点は考慮せず、当該のラベルが見られたかどうかのみを示すことにする。

Brit. : 26

Austral. : 29

N.Z. : 12

U.S. : 5

Sc. : 3

S. Afr. : 2

前述の無印のものをどう捉えるかという問題を別にすると、かなりの数をオーストラリア方言が占めていることが見て取れる。次にニュージーランド方言が続き、アメリカ英語はやや少なく見える点などが、RSの特徴と考えられるかもしれない。

なおワードペア形式のRSに関しては、これらの地域性によるものと考えられる数値の違いなどは確認することができなかった。

4. 3. rhyming slangの諸特徴とワードペアとの比較

RS全153例を通じて、どのような語が用いられているか、あるいはどのような意味を表すかといった点に関して、いくつかの傾向や特徴を挙げることができるだろう。

- 1) 比較的簡素な語で具体的な事柄を表す
- 2) 固有名詞、特に人名が多く用いられる
- 3) 人のくらしや各国の事情など日常的な状況を示す

もちろんワードペア形式のRSについてもこれらの傾向は当てはまるが、これらを「ワードペア全般」に見られる傾向や特徴と照らし合わせて見た場合には、やや異なる面が見えることもある。

1点目の日常的な語から成っていること自体は、RSは口語表現ゆえであると説明でき、それ自体には何ら不自然なところはないだろう。対して、ワードペアの方は必ずしも日常的な語から成っているとは限らない。ワードペアの中でも口語的な表現（慣用句等）については同様の傾向が見られると思われるが、前述したようにさまざまな場面で用いられるワードペアには、もともと抽象的な語を組み合わせたペアや、あるいは普通の語句が組み合わせられた結果として抽象的な概念を表すようになる場合などがある。それらはテキストによっては決して例外的とは言えないほどの数・頻度で見られ、この点はワードペアとRSで大きく異なる傾向を示していると考えられる。

2点目の人名に関して言えば、これもおそらくは1点目と関連しており、具体的で日常的な語の使用

の延長線上であると捉えられるかもしれない。ワードペアについても人名からなる表現がいくつか見られる。しかし以下の点でRSとワードペアの人名の使用には異なる面がある。

RSに用いられている人名は幅広い。歴史上の偉人やその時々の有名人、果てはナーサリー・ライムに出てくる架空の人物まで、ヴァリエーションが豊かである。もっとも、それらの人の本来の特徴などが語句としての形成に寄与しているかは疑問が残る。韻を踏むものであれば良いという観点もあるのかもしれない、あるいはむしろ、話すときに（使うときに、あるいはRSを作るときに）、どのような人名を選択するかについて、話者にとってはある種の「センス」が問われるものなのかもしれない。

これに対してワードペアでは、人の名前が結び付けられる場合には基本的な人物名であることがほとんどである。また特徴のある人物名であっても、例えば Ozzie and Harriet や Box and Cox などは、元は作品の登場人物であったものから、意味としては「一般の夫婦」や「役割などの共有」を表すものへと、固有名詞から一般名詞へとといった意味変化が生じている（青木2016b）。また人名が用いられたワードペアの中には、元の名前ではなく他の人名と「入れ替え」がきくものまで見られることがあり、これらの例からは1つ1つの人名の「存在意義」が希薄になっていることが窺われる。RSの方は、その半分は後に隠されるとはいえ、まずは韻を踏むものでなければならず、入れ替えられるのであればその範囲内でのみ許されるようである。この場合、RSの方が元の動機付けを多く保っていると言え、そういった制限のないワードペアの方が変化の度合いがより大きいとも考えられる。

3点目に関しては、古典的なイギリス英語のRSについては日常的な事物の表現が多いことや、またオーストラリア方言のものなどには「移民」などイギリスとの繋がりを示唆するものが見られるなど、いくつかの面を特徴として指摘できるであろう。

そういった面の1つとして、「犯罪に関する言葉」や「囚人用語」が多いという点を挙げることもできるかもしれない。総じて、「盗み」「警官」「情報屋」「看守」など、犯罪や犯罪者にとっては身近な場面で用いられるであろう表現が多い印象である。しかしながら、特に犯罪に手を染めていなくとも、そうした「ストリートの言葉」を格好良いと捉える向きもない訳ではないため、一概に眉をひそめるものばかりとも言えないだろう。

なお、こうした表現の1つである tea leaf ‘thief’ は、上に含まれる特徴が複合的に合わさっていると言えるだろう（犯罪に関する言葉とイギリスの紅茶文化）。当該の表現は、Smithに “One of the most enduring of all Cockney rhyming slang phrases” (p.76) と言われるほど深く英語に根付いているが、それはこのことが理由ではないかと推測される。

5. むすび

ここまで示したRSとワードペアの接点を探る考察により、今まで言われてきたRSの諸特徴の多くがある程度裏付けられたと思われる。また特にワードペアに見られる傾向が、ワードペアよりは限定された状況であるRSにおいて、いくつかの点においてはそのまま、また別の点においては変容しつつ現れていることが確認された。過去の研究においてはワードペアそのものに関しても「慣用句・定型表現に限られる」とする偏った見方もあったが、近年の研究では必ずしもそうとは言えないことが主張されてきている。RSもまた、程度の差こそあれ、考えられてきたよりは広い場面で用いられていることもわかってきたのではないだろうか。さらに、今回はRSが表す「意味」については詳細な考察を加えたとは言えないが、RSもワードペアほどではないかもしれないが、多様な意味を表し複合的な意味変化を経ている可能性もあり、この点については今後の研究課題として認識されるであろう。

参考・参考文献

- 青木繁博「英国王ジョージ6世のスピーチにおけるワードペアの劇的效果」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』43 (2013): 7-20.
- _____. 「英語ワードペア表現の5つのタイプと意味変化」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』46 (2016): 79-88.
- _____. 「*bread and butter*の意味消失：慣用的な英語並列表現が意味変化するプロセスについて」『日本認知言語学会論文集』16 (2016): 453-458.
- Ayto, John. *The Oxford Dictionary of Rhyming Slang*. Oxford University Press, 2003.
- Cooper, William E., and John Robert Ross. "World Order." *Papers from the Parasession on Functionalism*. Eds. Robin E. Grossman, L. James San, Timothy J. Vance. Chicago Linguistic Society, 1975. 63-111.
- Franklyn, Julian. *A Dictionary of Rhyming Slang*. London and New York: Routledge & Kegan Paul, 1975, reprinted 1987.
- Gustafsson, Marita. *Binomial Expressions in Present-Day English: A Syntactic and Semantic Study*. Turku: Turun Yliopisto, 1975.
- _____. "The Syntactic Features of Binomial Expressions in Legal English." *Text* 4 (1984): 123-141.
- Katami, Akio. "Word Pairs in Middle English Mystic Prose of the Fourteenth Century." 『埼玉学園大学紀要』経営学部篇 第9号 (2009): 177-189.
- Kikuchi, Kiyoaki. "Repetition in *The Owl and the Nightingale*." 日本英文学会 *Studies in English literature* (1986): 17-38.
- Koskenniemi, Inna. *Repetitive Word Pairs in Old and Early Middle English Prose*. Turku: Turun Yliopisto, 1968.
- Leisi, Ernst. *Die tautologischen Wortpaare in Caxton's "Eneydos"*. New York: Hafner, 1947.
- Malkiel, Yakov. "Studies in Irreversible Binomials." *Lingua* 8 (1959): 113-160.
- Mollin, Sandra. *The (Ir)reversibility of English Binomials: Corpus, Constraints, Developments*. Studies in Corpus Linguistics 64. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 2014.
- 大塚高信・中島文雄(監修)『新英語学辞典』(縮刷版) 研究社、1999.
- Smith, Daniel. *Cockney Rhyming Slang: The Language of London*. London: Michael O' Mara, 2015.
- 須部宗生「語順固定の英語対句表現の一考察」『静岡産業大学国際情報学部研究紀要』第1号 (1999): 39-68.
- 谷明信「初期中英語the 'Woioing Group' のWord Pairsの用法とその特徴」『兵庫教育大学研究紀要』第23巻 第2分冊 (2003): 19-24.
- _____. 「Chaucer の散文作品におけるワードペア使用」『ことばの響き—英語フィロロジと言語学—』今井光規・西村秀夫(編). 東京: 開文社, 2008. 89-116.
- 飛田茂雄(編)『現代英語情報辞典』研究社出版、2000.
- 渡辺秀樹「同意語並列構文の系譜」『英語青年』140.6 (1994年9月号): 285-287.
- Wilson, R. M. "Three Middle English Mystics." *Essays and Studies*. New Series 9 (1956): 87-112.

Online Resources

OED Online. <http://www.oed.com/>

【資料】OED Online における rhyming slang リスト (初出年代順)

番号	項目	表すもの	初出の年	最後出の年	ワードペア形式	《注記》
1	Richard Snary, Dick Snary	dictionary	1627	1841		
2	Hobson's choice	voice	1660	1961		
3	nanny-goat	anecdote / tote	1764	2000		
4	Jimmy Grant	immigrant or emigrant	1845	1948		Austral., N.Z., S. Afr.
5	joanna, joano, johanna	piano	1846	1972		
6	Scapa Flow	go	1846	1977		
7	apple(s) and pears	stairs	1857	2006	○	
8	Artful Dodger	lodger	1857	1931		
9	Barnet fair	hair	1857	1969		
10	bird-lime	time	1857	1962		
11	Everton toffee	coffee	1857	1960		
12	lath and plaster	master	1857	1857	○	1例のみ
13	linen-draper	newspaper	1857	1972		
14	mince pie	eye	1857	1989		Brit.
15	oats and chaff	footpath	1857	1935	○	
16	plate of meat	street / feet	1857	1996		
17	round-the-houses, round-me-houses	trousers	1857	1996		Brit., Austral., S. Afr.
18	Rory O'More	floor / door	1857	1997		
19	Scotch peg	leg	1857	1917		
20	split pea	tea	1857	1931		
21	turtle-dove	glove	1857	1972		
22	north and south	mouth	1858	1986	○	
23	bees and honey	money	1859	1973	○	
24	bull and cow	row	1859	1962	○	
25	Chevy Chase, chivvy chase	face	1859	1955		
26	daisy roots	boots	1859	1943		
27	elephant trunk, elephant's trunk	drunk	1859	1931		
28	frog and toad	road	1859	2007	○	Brit., Austral.
29	needle and thread	bread	1859	1935	○	
30	pen and ink	stink (<i>n.</i> , <i>v.</i>)	1859	2003	○	Brit.
31	rogue and villain	shilling	1859	1973	○	Brit., Austral.
32	twopenny	head	1859	1931		
33	hot beef	"Stop thief!" (<i>int.</i>)	1861	1973		
34	saucepan lid	quid / kid	1861	1960		
35	John Dunn	one-pound note	1867	1905		Austral.
36	sky-rocket	pocket	1879	1979		
37	china plate	mate	1880	1965		
38	fisherman's daughter	water	1880	1880		1例のみ
39	pig's ear	beer	1880	2002		Brit.
40	tiddlywink	drink	1880	1960		
41	weeping willow	pillow	1880	1944		
42	lord of the manor	tanner (old sixpence)	1882	1972		
43	Hampstead Heath	teeth	1887	1962		
44	Jimmy O'Goblin, Jemmy O'Goblin	sovereign (20 shillings)	1889	1973		
45	raspberry tart	heart / fart	1892	1959		
46	grasshopper	copper (policeman)	1893	1950		
47	navigator	tater (potato)	1893	1893		1例のみ
48	Noah's Ark	nark / park / shark	1898	1991		Austral.
49	rub-a-dub, rub-a-dub-dub	pub	1898	2007		Brit., Austral., N.Z.
50	Rosie Lee	tea	1901	1997		Brit.
51	Oxford scholar	dollar	1902	1991		Austral., N.Z.
52	tea-leaf	thief	1903	1977		
53	John Hop	cop	1905	2015		Austral., N.Z.
54	Oscar Asche	cash	1905	2011		Austral., N.Z.
55	Derby (or Darby) kelly or kel	belly	1906	1970		
56	[old] pot and pan	old man	1906	2002	○	Brit., Austral.
57	Pat Malone, on one's Pat Malone	on one's own, alone	1908	2002		Austral.
58	trouble and strife	life / wife	1908	1977	○	
59	God forbid	kid	1909	1999		
60	hot potato	waiter	1909	1960		Brit.

番号	項目	表すもの	初出の年	最後出の年	ワードペア形式	《注記》
61	pomegranate, Pommy Grant	immigrant	1912	2003		Austral., N.Z.
62	babbling brook	cook	1913	2008		Austral., N.Z.
63	dog's meat	feet	1913	1998		U.S.
64	five-to-two	Jew	1914	1948		
65	almond rock	socks	1917	2007		
66	mad mick	pick (pickaxe)	1919	1973		Austral.
67	platters of meat	feet	1923	1970		
68	stone jug	mug	1923	1974		
69	bag of fruit	suit	1924	2001		Austral.
70	twist-and-twirl	girl	1924	1979	○	U.S.
71	Adam and Eve	believe	1925	2008	○	
72	flowery dell	prison cell	1925	1970		
73	half-inch	pinch (to steal)	1925	1972		
74	Jack Jones, on one's Jack Jones	on one's own, alone	1925	1972		
75	loaf of bread	head / dead	1925	1973		
76	Peckham rye	tie	1925	2003		
77	skin and blister	sister	1925	1987	○	Brit.
78	tit for tat	hat	1925	1976		
79	Uncle Ned	bed / head	1925	1982		
80	Joe Blake	snake	1927	1970		Austral.
81	ocean wave	shave	1928	1934		
82	shovel and broom	room	1928	1938	○	U.S.
83	Simple Simon	diamond	1928	1929		U.S.
84	Berkeley Hunt, Berkshire Hunt	cunt	1929	1977		
85	rats and mice	dice	1929	2005	○	
86	greengage	stage / wages	1931	2003		
87	Jack's alive	five, five-pound note	1931	1938		Sc.
88	pony and trap	crap	1931	2004	○	Brit.
89	River Ouse, river ooze	booze	1931	1962		
90	tomfoolery	jewellery	1931	1980		
91	whistle and flute	suit	1931	1980	○	
92	dicky-bird, dickey-bird	word	1932	1970		
93	grass, grasser	shopper (informer)	1932	1968		
94	Harry Tate	state	1932	1932		1例のみ
95	me-and-you	menu	1932	1943	○	
96	steam tug	mug	1932	1978		
97	pound of lead	head	1933	1961		
98	brass nail	tail (a prostitute)	1934	1938		
99	cobbler's awls, cobblers' awls	ball, balls	1934	1970		
100	jam-jar	car	1934	1962		
101	Lakes of Killarney	barmy	1934	1963		
102	Tod Sloan, on one's Tod Sloan	on one's own, alone	1934	2013		Brit.
103	bottle and glass	arse	1935	2011	○	Brit.
104	bubble-and-squeak	beak / Greek	1935	1968	○	
105	Mickey Bliss, to take the mickey out of	to take the piss out of	1935	1991		Brit.
106	nickel and dime	time	1935	1960	○	Brit.
107	butcher's hook	look	1936	1960		Austral., N.Z.
108	I should coco	I should say so	1936	2008		Brit.
109	eighty-six	nix	1936	1981		U.S.
110	four-by-two	Jew	1936	1970		
111	iron hoof	poof	1936	1996		Brit.
112	Sweeney Todd	the Flying Squad	1936	1977		
113	Jimmy Riddle	piddle	1937	1971		
114	needle and pin	gin	1937	1973	○	
115	rock of ages	wages	1937	2003		
116	carpet-bag	drag	1938	1938		
117	two and eight	state	1938	1960	○	
118	monk, out the monk	drunk	1939	1995		N.Z.
119	ampster, Amsterdam	ram	1941	1975		Austral.
120	fiddle-did	quid	1941	1967		Austral.
121	ham and beef	chief warder in a prison	1941	1962	○	
122	mallee root	prostitute	1941	2008		Austral., N.Z.

番号	項目	表すもの	初出の年	最後出の年	ワードペア形式	《注記》
123	Nelly Duff	puff (life)	1941	1999		
124	rabbit and pork	talk	1941	2006	○	Brit.
125	pitch-and-toss	boss	1942	1992	○	
126	apples and spice, apples and rice	nice	1943	1994	○	Austral., N.Z.
127	Khyber Pass	arse	1943	1968		
128	tom-tit, tomtit	shit	1943	1982		
129	Ned Kelly	belly	1945	1988		Austral.
130	post-and-rail	fairy tale	1945	1945	○	Austral.
131	Hampton Wick, get on one's wick	prick	1945	1984		
132	Richard the Third	bird (young woman)	1950	1997		Brit.
133	Moreton Bay fig	fizzig (informer)	1953	1975		Austral.
134	teddy bear	lair	1953	1974		Austral.
135	potato peeler	sheila (girl)	1957	1971		Austral.
136	boat race	face	1958	2006		
137	boracic lint	skint (penniless)	1959	1984		
138	ginger-beer	queer	1959	1968		
139	on the mazel and brocha	on the knocker	1960	1992	○	Brit.
140	Mutt and Jeff, mutton jeff	deaf	1960	1997	○	Brit.
141	Bristol Cities	titties (breasts)	1961	1969		
142	dog and bone	telephone	1961	2001	○	Brit.
143	plate of ham	gam	1961	1987		
144	Tommy Rollocks	bollocks (<i>int.</i>)	1961	2005		
145	grumble and grunt	cunt	1962	1966	○	
146	septic tank	Yank (an American)	1967	2006		Austral., N.Z.
147	Mars bar	scar	1971	1987		
148	Malcolm Fraser	razor	1973	1992		Sc.
149	pork pie, porky pie	lie	1973	2000		Brit.
150	Dorothy Dix	a six (<i>Cricket</i>)	1979	1999		Austral.
151	cream crackered	klnackered	1983	2006		Brit.
152	Ruby Murray	curry	1983	2007		Brit.
153	Scooby Doo, not to have a scooby	clue	1993	2006		Sc.